



「Bel été !
素敵な夏を！」

photo by Saori

Parisien 突撃インタビュー

今月のお客さま

シルヴァン(澤田 春吟) さん

五感で感じる津軽のスピリット

フランス人津軽三味線奏者にインタビュー

今回は、津軽三味線奏者として日仏で活躍するシルヴァンさんと澤田春吟(はるぎん)さんにインタビュー！ サントリーホールや演歌歌手・細川たかし氏との演奏経験のあるシルヴァンさんですが、レパートリーは広く、伝統曲から、クラシック、アニメ音楽、アルゼンチンタンゴまで多岐にわたります。シルヴァンさんの津軽三味線への情熱と、軌跡を伺いました。



©Christophe Leonardi

ひとりだけだった 外国人弟子入り

◆現在の活動について教えてください。

月に1回ほどコンサートを行っています。病院で演奏したり、大学では日本の農村音楽や三味線を紹介することもあります。フランス人に三味線も教えていますよ。毎日4時間ほど練習していて、私のそばにはいつも三味線がある。まるで私が三味線みたいね！日本には年に3〜6ヶ月ほど滞在して、パートナーであり、アコーディオン奏者の伊藤裕子さんと演歌歌手の細川たかしさんと演奏しています。細川たかしさんはお話するととても愉快な方でしたよ。

◆津軽三味線を始めたきっかけは？

元々、私はプロとしてコンセルバトワールでクラシックギターを教えていたんです。30年前に伊藤裕子(前述)さんと来日したのも、タンゴカルテットでギターを演奏するためでした。ある時、裕子さんが勧めてくれた津軽三味線の高橋竹山*のCDを聴いて感動して、三味線を買ったんです。1年間独学で学んだんですが、とても難しくて。東京にいる先生(工藤昭仙氏)を紹介してもらって会いに行き、10年間習っていました。

◆スペインのギターと津軽三味線には共通点があるのでしょうか？

津軽三味線と、スペインのフラメンコの音楽はとても近いものを感じますね。ギターの弾き方や、歌い方も似ている部分がありますし、**聞いてる人に強くエネルギーを与えるところも似ているな**

と感じています。

◆何年くらい津軽三味線を弾いていますか？

約25年です。師匠の細川孝義先生(旧名・澤田勝春)は、津軽三味線全日本金木大会のA級で優勝した奏者です。師匠は最初とても優しく、よくしてくださったんですが、名取をいただくために入門して正式に弟子になってから、すごく厳しくなりました。弟子は他にもいたけど、外国人は当時私だけ。師匠の言うことを必死で聞いて、師匠の演奏は録音して後で聞いて真似したり。**日本語は難しいけれど、寿司や音楽の専門用語だけは理解できるんです(笑)**。たまに外国人だからって私を敬遠する人もいたけど、私は全然気にしない。ほとんどの人は私にとても優しくかったよ。今はアメリカ人やスペイン人も津軽三味線を学んでいます。

田植えから感じる 日本文化の内側

◆観客の反応はありますか？

日本では、外国人が伝統音楽を演奏することに対してとても温かく捉えてもらえます。**フランスでは、津軽三味線のエネルギーを好む人もいれば、音が強すぎると感じる人もいます**。裕子さんと「梅干し」というデュオを組んでいます。日仏両方で親しんでもらっています。この名前は、梅干しが「クセがあるけど、おいしい」というところからきています。梅干しに限らず、私は納豆・塩辛・馬刺し・焼酎も大好きだしね(笑)。Umeboshi

という音の響きはフランス人にはとてもsweetに感じられるということもあるね。このデュオではフランスの歌を和風に編曲したり、アニメ音楽やアルゼンチンタンゴを演奏することもあります。最近CDもリリースしました。

◆津軽三味線の魅力と難しさはどこにあるんでしょうか？

溢れるほどのポジティブなエネルギーが魅力です。難しさは、津軽の深い精神を理解すること。津軽三味線は地域の農村生活に根ざしているの、私はそのスピリットやエネルギーをより深く感じたい。それにはやっぱり日本でたくさんの方を感じないといけないんだ。

◆具体的にはどんな努力でしょうか？

映画を観たり、音楽を聴いたりすることかな。田植えもやらせてもらったり、五感すべてを使って、日本文化の内側を理解したいと思ったんです。私はフランス国内もたくさん旅しましたが、元々のルーツはカリブ海のフランス領グアドループなので、その文化も私の中には入っています。

◆今後の目標は？

もっと日本語を流暢に話せるようになって、日本に長く滞在したいですね。私にとっては日本が故郷みたいに感じるから。日本語は難しいし、特に漢字は「パズル」のようで、語彙も基礎から覚えられないといけないけれど、日々少しずつできるようになるのはとても面白いです。漢字は想像力への美しい扉でもあります。

*高橋竹山 津軽三味線の祖と言われる巨匠。1910生、1998年没。

毎週土曜日あさ9時30分から、テレビ朝日で放送。tv asahi



食材ひとつに、多彩なドラマ。

毎週土曜日に放送中の「食彩の王国」は、身近な「食材」たちが主役。さまざまな食材が織りなす食文化の歴史や産地の風土…。そこに流れる時間をひも解くことで、人と食材のかかわりを探っていきます。

食彩の王国



語り 斎藤丸ひろ子

番組ホームページ www.tv-asahi.co.jp/syokusai

制作 tv asahi テレビマンユニオン ViViA) [企画協力] ビデオプロモーション 提供 TOKYO GAS

マダム愛のわたくし ミュラン

第150回

凱旋門近くにOPENした 素材の良さが光る新ビストロ

凱 旋門の近くに新しくオープンしたビストロ「Le Vieux Crapaud」。実はこのオーナーは、以前私が気に入って通っていたビストロのオーナーでもあり、そんなご縁もあって訪れるのを楽しみにしていました。店内はセンスよく整えられていて、肩肘張らずに過ごせる温かな雰囲気。とても居心地のよい空間です。ワインの種類も豊富で、ワイン好きには嬉しいラインナップが揃っています。

料理はどれも見た目はとてもシンプル。でもひと口食べると、素材の良さにこだわっていることがしっかり伝わってきます。新鮮な食材を使い、フランスの王道料理を丁寧に仕上げている印象です。

この日はタルタルとリードヴォーを注文。タルタルはひと口でクオリティの高さがわかる味わいで、肉の旨みがしっかり感じられます。リードヴォーは外側がカリッと香ばしく、中は驚くほどジューシー。思わずフォークが進み、ワイ

ンとの相性もぴったりでした。

デザートにはババ・オ・ラムを。一般的なものとは少し違い、スポンジの周りがほんのりカリッとしていて、それが良いアクセントになっています。ラムの甘さはややしっかりめですが、食事の最後を締めくくるデザートとしては満足感のある一皿でした。

正直量はあまり多くないのですが、日本人にとってはちょうど良いのがありがたく感じます。凱旋門から歩いてすぐという立地も魅力のひとつ。観光客向けのレストランも多いエリアですが、ここは覚えておくと、ふと美味しいビストロ料理が食べたくなったときに頼りになる一軒だと思います。

A. 店内はモダンで落ち着いた雰囲気。 B. メインのリードヴォー、普段はそれほど得意な食材ではないのですが、こちらの一皿はつい主人のお皿から分けてもらうほど美味しかったです。 C. オーナーが以前営んでいたビストロではタルタルステーキがとても好きだったので、こちらでも迷わず注文。味は美味しかったものの、以前のお店のような工夫は少なく、比較的シンプルなタルタルになっていたのが

writer マダム愛

東京で知り合った仏人男性に連れ去られ、気が付けばパリジェンヌとやらに。パリのレストランと生活、2つのブログを書いています。

blog マダム愛の徒然パリ日記

<http://www.paris777.blog.fc2.com/>

blog マダム愛のアパートの鍵貸します

<https://www.madameai.com/>

今月のハート

料理 ♥♥♥♥♥
ドリンク ♥♥♥♥♥
サービス ♥♥♥♥♥
雰囲気 ♥♥♥♥♥
コスト ♥♥♥♥♥

Le Vieux Crapaud

16 Rue Lauriston 75116
01 73 75 70 10
<http://levieuxcrapaud.fr>



少しだけ残念でした。 D. デザートのババ・オ・ラムは型でしっかり焼かれているのか、外側がカリッとしているのがとても美味しく印象的！甘さはやや強めでしたが、パリのビストロ！という甘さのデザートでした。

癒し系フランス男子ギョームの

パリで茶柱シルブプレ

Chanoki でミニ闘茶会!

ほ ぼ毎週どこかに祝日のあった5月。連休を利用して小旅行に行く方が多い中、我が家は3人で「Bonjour! いらっしゃいませー!」と大きな声でお客様をお出迎え。

35度超えの熱風がほわ〜と吹いてくる暑い5月の最終週、Chanoki では「静岡・お茶の市川園」4代目市川桃子さんをお迎えしワークショップを開催。茶師の仕事・使命、男性の多い茶師の世界で「女性茶師」としての立ち位置、そして今後の挑戦を中心に話してくださいました。日本に3人しかいない女性茶師の内の1人を前にし、参加者の皆さんはお茶についてだけでなく女性の立場など社会的な質問も。桃子さんの一挙一動に視線を向けながら、参加者の皆さんはお茶を観察し・手に取り・香りを嗅いでいました。

お昼寝から目覚めた3歳半の娘も、ワークショップに途中参加。桃子さんと一緒に、拝見盆に入っている3種類のお茶を手に取り観察。女性茶師の市川桃子さんは、この秋開催される全国茶審査技術競技大会（闘茶会）にも出場されます。我が家3人、Chanoki のお客様みんなが応援しています！

writer ギョーム・ユルポー

パリにある日本茶専門店「CHANOKI」店主。日本留学中に小笠原流煎茶道に出会い、その奥深さにハマる。お店では日本の農家から直接買い付けたこだわりの茶葉が味わえる。 Instagram @chanoki_paris HP <https://www.chanoki.fr/>



市川園茶師市川桃子さん（写真中央）と一緒に。



ワークショップの参加者



パリに暮らす猫パリにゃん・リリちゃんとゴキゲン指揮者キョーリのほのぼの生活

パリにゃん通信



マリー・アントワネットの離宮

先 日、広大なヴェルサイユ宮殿敷地内にあるマリー・アントワネットの離宮、プチ・トリアノンでのイベントに参加しました。普段は開館していない夕方から夜にかけてのイベントで、お庭の各所で合唱団が歌っていたり、大道芸人がいたり、当時の洋服を着た俳優さんが寸劇をしていたり。夕方に訪れたトリアノン宮は本当に光が美しく長閑で、豪華絢爛なヴェルサイユ宮殿とは対照的。王妃がここでの生活が気に入っていたのが分かるなあと感じたり、恋人のフェルゼンと密会していたという暗い洞窟？を見て、これはちょっと無理と思ったり(笑)。イベントは楽しかったのですが、バラが美しく咲いている庭で変な虫に刺されたらしく1週間たっても痒みと腫れが一向に引かず。ヴェルサイユのバラならぬヴェルサイユの虫にやられました！

writer 押田杏里

日仏混合アマチュア合唱団「パリ・アブリコ合唱団」を主宰する指揮者。パリで猫のリリちゃんや旦那様と「今を生きる」をモットーに暮らしています。 Instagram @abricotp

とびこめ! ミュゼのとびら

今更聞けないフレンチアート

国を超え時代を超えてオランジュリーで再発見するアンリ・ルソー

パリ中心部、チュイルリー庭園の南西に位置するオランジュリー美術館。

「オランジュリー」とは本来、オレンジなどの柑橘類を冬の寒さから守るための温室を意味します。オレンジの木を冬越しさせるオランジュリーを所有できることは、王侯貴族のステータスでした。この建物も、1852年、ナポレオン三世の時代、チュイルリー庭園のオレンジの木々を保護する温室として建設されました。セーヌ川に面した南側には大きなガラス窓が設けられ、北側は厚い壁で覆われています。冬でも太陽光を最大限に取り込むための工夫でした。しかし、19世紀末になると温室としての役割は次第に薄れ、展示会場として利用されるようになります。そして1918年、モネが《睡蓮》連

作を寄贈したことで、オランジュリーは美術館として新たな歴史を歩み始めました。そのため、オランジュリーと聞けば、多くの人が《睡蓮》を思い浮かべます。しかし実はこの美術館、アンリ・ルソーの重要なコレクションを所蔵する場所でもあります。

その立役者が画商ポール・ギョームです。ギョームは、ルソーをいち早く評価した画商であり、彼が蒐集したコレクションは現在、同美術館の核のひとつとなっています。ルソーといえば、遠近法にとらわれない空間表現や幻想的な植物世界が特徴的ですが、オランジュリーが所蔵する作品には、市民の日常や近代化するパリ近郊の風景を題材とした作品も含まれます。

『ジュニエ爺さんの荷車』はその代表例。ジュニエはルソーの友人で、毎朝パリ近郊の農家から野菜を仕入れ、販売していた行商人でした。ルソーは彼にいくらか借金をしていたといわれており、ジュニエが新しく馬を購入し、その馬を大変誇りに思っていたことから、ルソーがその姿を描いた一枚の絵を制作することになりました。

た。一見すると素朴な風俗画に見えますが、そこにはルソーならではの独特な空間表現が見られます。

現在、オランジュリー美術館ではアメリカのバーンズ財団と共同で「アンリ・ルソー：画家の野望」展を開催中。バーンズも熱心なルソーのコレクターで、ギョームはバーンズがルソーの絵画を購入する際の仲介役を務めたそうです。パリとアメリカの二大コレクターによる作品群は必見の価値ありです。7月20日まで。

writer 妹尾優子

仏語教師の傍、仏文学朗読ラジオ「Lecture de l'après-midi」の構成とナレーションを担当。美術史 & 日本史ラブ。日仏の文学からアートまで深掘りする日々。

HP <https://note.com/tabichajikan/m/md750819c9bc7>

『ジュニエ爺さんの荷車』アンリ・ルソー／オランジュリー美術館

仏人添乗員リラの

日本リラ散歩

ポップコーンを片手に劇場へゴー!

この前、約9年ぶりに映画館に行ってみた。確かに最後行ったのはコロナ前であったことは間違いないけど、いつの間にこんな遠い



アットホームな上映

昔になったのか。3Dがあることはギリ知っていたけど、今は「ScreenX」やいろんな種類があって、まったく追いついていなかった。「Ultra 4DX」を初めて体験してみた(実は3回もリピートして)、背中を突然叩かれて下手なマッサージチェア感はあるけど楽しかった。ただ、通常料金は昔より値上げしているし、特別上映だとさらに高く、お財布にはあまり優しくない。

そのちょっと後に、昨年見損ねた映画がまた期間限定でやっているのをSNSで知って、ウェブサイトを見てみたら30人規模の劇場だった。ミニシアターを想像していたけど、その場所のGoogleレビューを見てみたら人の家じゃない? というような写真があってちょっとびっくり。壁にLEDのスクリーン、前にふかふかのソファや普通の椅子、ミニテーブルが置いてある。最新のアトラクション「Ultra 4DX」を体験したあと、友達のうちで映画パーティーをやっているような雰囲気でもまた違う体験ができた。しかも見たかった映画は音楽関係ですべて応援上映だった。チケットを買った時点では

観客は4人。一人で行く予定だったので、知らない4人でソファに座って応援できるのかと不安だったけど、各自ヘッドフォンをして見る感じだった。最終的に11人で応援の様子もほとんどなくみんな静かに見ていたけど、それもそれでとても楽しかった。

日本の映画館では、アニメ映画も豊富だから邦画が多い印象。ヨーロッパの中でフランスは映画館入場者数をもっとも多く、国内映画の市場シェアも多い方だ。フランスで最後に映画館に行ったのは多分2016年、またいつかフランスでも見に行きたいな〜



writer リラ

東京で翻訳者としても活躍する30歳のフランス人女子。持続可能な社会の実現に向けての活動もする。趣味は編み物とベランダの植物の世話。

トモクンの

アレコレ、パリコレ、ナンゾコレ〜

革命記念日前夜恒例の催し物
消防署でのダンスパーティ

普段は街中で人々と接触することの少ない消防隊員が、パーティ券を片手に街を行き交う人々に声を掛ける。これは革命記念日(7月14日)の1ヶ月程前から見られる光景です。革命記念日の前夜に限り、各地の消防署を開放してダンスパーティ(Bal des Pompiers)が行われます。18区のモンマルトルにある消防署が1937年に即興的にパーティを開催したことが発端となり、各地に広がり現在のような国家的行事となったそう。時間は21時からスタートし、次の日の3時〜4時まで続くのが一般的。本格的なクラブ時間設定です。

パリでは、その18区の消防署を筆頭に5区や15区、9区などの消防署のパーティが有名ですが、肝心のパーティの音楽については、僕の経

験からすると極めてダサく、いわゆるクラブミュージックを聴きながら踊れると思って行くとガッカリするので注意が必要。要するに音楽は二の次。

各消防署の消防士たちは街中に出てパーティ券を手売りするのだけれど、気になるお値段は数ユーロ程度。消防署にとって重要な財源になる、という程の金額ではないのですが、その日を盛り上げたい一心で皆さん頑張ります。というのは、厳しい訓練の連続で外界との接触の少ない消防士たちにとって、ダンスパーティはパートナーを探すチャンスとなるからです。それは一般人にとっても同じ。出会いを求めてパーティに出掛ける人が多かったです。僕の通っていたファッションスクールの先生(女性)は、消防署のダンスパーティで知り合った消防士ではない男性と出会って見事ゴールインしました。

その消防士たちですが、実はフランス陸軍直属であり、警察官よりも上位でフランス国家憲兵隊と同等扱い。火事や救急搬送など、常日頃

からお世話になる機会の多い市民にとっては、消防士たちは頼りがいのある存在で、尊敬の的でもあります。シャンゼリゼ大通りで開催される革命記念日のパレードでは、最後を飾って行進するのですが、ダンスパーティ明けの眠そうな顔をした消防士たちをチェックするのもしもーもかもかもしれません。

writer トモクン

トモクンという名の45歳。在仏27年。ファッションジャーナリスト(業歴17年)は仮の姿で、本当はただの廃品回収業(業歴5年)。詳しくはブログ『友くんのパリ登の市散歩』にて。

blog 友くんのパリ登の市散歩
<http://tomos.exblog.jp>



赤毛のアン舞台 プリンスエドワード島へ

私 が大好きな『赤毛のアン』の舞台、カナダのプリンスエドワード島について、ついに行ってきました。

N.Y.から乗り継ぎで島に到着。車がないと聖地巡礼は難しいとのこと、日本語ツアーを予約。

ハイライトはグリーンゲブズの記念館です。モンゴメリさんの人生年表によれば1908年に赤毛のアン出版。亡くなったのは1942年。旦那さんのうつ病の看病を続け、「最後は睡眠薬の過剰摂取で亡くなりました！」赤毛のアン最後の「人生には曲がり角があって、その向こうにも希望の光が輝いているはず」ってアンの子供に感動していたのに、光がなかったってこと？

ショックを引きずりながら、家へ向かいます。思ったより小ぶり。中にも入ることができて、ファンを喜ばせるべく、お話に登場したグッズが隠されているというんだけど……ありました！親友ダイアナにいちご水と言って大量に飲ませて酩酊させたワイン！ネズミが中で死んでいた



▲恋人の小道

▼アンのお部屋



パリジェンヌからニューヨーカーへ
アラフォー女・怒涛の365日戦争

マリラお手製クリームソースのツボ！

2階にはアンのお部屋。マッシュがサプライズで仕立ててあげたパフスリーブのワンピースに、ギルバートに「にんじん」とからかわれて、アンが逆上して叩きつけた石板を発見。警察沙汰になってもおかしくない案件です。ギルバートの頭は丈夫だしそれを聞いて笑っていたマリラは本物。廊下を挟んだ向かいにはマリラの部屋で、それぞれのベッドの下に洗面器が。「トイレは屋外なので、夜中の間のトイレに洗面器を使います」！大も？カナダは匂わないの？

家の前にある「恋人の小道」ではリスが横切り、木漏れ日と日の当たる場所のバランスが美しく懐かしい。って田無にこんな場所はありませんでした。「お化けの森」に通じる橋の下には小川が陽の光を反射させていました。「まじ？」「なんかキラキラしてるんだけど」想像力のかけるのなの人、とアンから軽蔑されそうな言葉しか出てきません。

もっと大きな畑に囲まれている家を想像していましたが、小さい畑のみ。家の前の「お化けの森」を歩いている最中に「ウォー！」という声が聞こえてビビりましたが、ゴルフで盛り上がりすぎているおじさんたちの歓声でした。そうか、マリラ、ゴルフ場に畑を売ったんだね……。

writer 吉野亜衣子

ラジオ局を辞め、夫の留学についてパリへ。帰国後、日仏文化交流のための NOISSETTE を設立。2022年で設立10周年。2024年春よりNY在住。

HP <https://note.com/noisettepress>

podcast <https://podcasters.spotify.com/pod/show/cafenoisette>

本ソムリエ・ムッシュブルドンの

トリアン・ファクワール

愛着なき恋愛なし

この本は恋愛感情の誕生の解明だけではなく、その愛が持続可能になるメカニズムについて探っている。フランス語では一目惚れのことを「avoir le coup de foudre（稲妻に打たれる）」と、恋に落ちる瞬間の突然と偶然を表現する。恋に落ちる時、稲妻のような凄まじい打撃を受け、相手が瞬間的に自分の世界の軸となるのだ。その強烈な気持ちの原因は脳内で放出されるホルモン、オキシトシンにある。しかし、信頼・共感・寛大さ・性に関して重要な役割を果たすこのホルモン放出が収まる時、愛の維持に最も重要なのは「アタッチメント（愛着）」だ。これがボタンタッチで任務に入る。

ここまでは誰でも気づくことだが、ここからは神経精神医学者の著者シリユルニクがアタッチメント理論と愛の関係を徹底的に探っていく。シリユルニクは心理学における「レジリエンス（精神的回復力）」の概念を形成した学者として知られている。戦時のトラウマを克服した経験をはじめ、精神科医としての長い実践活動に基づいた膨大なエピソードを通して、人々と愛を多角的に、そし

て興味深く語っている。

恋に落ちることは、人と人が結びつく絆が深く関係する。母と幼児が結んだ絆から、その後子どもが親戚や周囲の人達と作った関係は、性に関わるホルモン放出が活発になる青春からの恋愛の可能性に影響する。平和な環境の中で作った「安全な愛着」のなかにいる人は、紛争に塗れた環境における「不安な愛着」に不幸をもたらされた人より、恋をしやすい。不安を抱える者は、失恋の経験为了避免のために恋愛関係を諦める傾向があるという。

著者が問いかけるのは、社会的・気候的な不安を抱える新世代がどうやって恋愛関係を作るのか？ 時代によって恋愛関係が何度も変わってきたことを考えれば、我が子達も、きっと「未来の愛の形」を作れるだろう。

writer ジャンマリー・ブルドン

福岡在住のフランス人。福岡で仏語教室やフランスに関わるイベント企画を通してフランス文化普及に貢献する。Nautilus主宰。

Instagram @libr_nautilus



『人が愛するとき心は何がおきるのか——歴史と科学から愛を解明する』
ポリス・シリユルニク 作
／ダコスタ吉村花子 訳
／原書房

日本で使われている
フランス語、
本当はどういう意味??

バーバパパ

直訳すると、「Barbe à papa（パパのお髭）」です。それからフランス語では綿菓子のことをバーバパパと呼ぶようになっています。かつて髭が綿菓子みたいにフワフワしてたのかしら。それか昔の綿菓子はもっと硬くてゴウゴウしてたのかしら。だいたいヨーロッパの綿菓子はピンク色が多いの。絵本のバーバパパのピンク色はきっとそこから来てるんじゃないかな？
てことはバーバママは「ママの髭」なんですね。

ノアセットプレス公式ポッドキャスト

「カフェノアセット第35回」より編集部が抜粋し要約。

編集後記

★今号でノアセットプレスは150号を迎えました！いえーい！ひとえに読者とライターの皆様のおかげです。いつもありがとうございます！もう7月。夏休みが始まりますね。私は日本へ一時帰国して英気を養ってきます（主に和食で）。(編集Y) ★観光のベストシーズンと言われる7月のパリはイベントが目白押しのようにすね。気になったのはラ・ビレット公園の野外映画館。パゲットとチーズとワインを持って行って芝生の上で映画鑑賞？素敵すぎるー。(AD.F)

